

「八甲田の積雪はダム」

八戸工業大学 佐々木幹夫教授

保水力研究で東北雪氷賞

八甲田の雪の特性について研究を続けている八戸工業大学(八戸市)の佐々木幹夫教授(68)が、日本雪氷学会東北支部の東北雪氷賞功績賞を受賞した。一冬で20億トに上る八甲田の積雪について、雪質によって保水力が異なることなどを解析、高く評価された。佐々木教授は「こつこつと続けてきた研究が認められ、やりがいを感じる」と話している。

(若松清巳)

佐々木教授は同学会会員。30年前から八甲田の積雪特性の解析に取り組み、現地調査は約30回に上る。これまでの研究で、ザラメ状の雪などと比較すると、締まった雪の保水力が最も

高いことを突き止めた。佐々木教授によると、八甲田は4月ごろまで保水力が高い締まり雪が多く、これが徐々に解けながら水を放出。水は山の地中に浸透し、7月ごろには八甲田や周辺の山々を源流とする川の水となつて、周辺を豊かな水で潤すという。

としての雪の役割は徐々に分かってきた。今後は雪の硬度などと雪崩の関係を解き明かしていきたい」と意欲を語った。

佐々木教授は秋田県出身。1978(昭和53)年から同大に勤務し、海流や波、川の水の動きなどについて専門に研究してきた。日本雪氷学会の賞を受けるのは今回が初めてという。



八甲田の雪に関する研究について説明する佐々木教授。八戸市の八戸工業大

こつこつとした雪の保水力について、佐々木教授は「八甲田の積雪はダムと同じような働きをする」と表現。八甲田周辺の地域では夏場も湧水が起きにくいのはこうした積雪の恩恵として「八甲田の積雪と周辺住民の生活は密接に関係している」とした。

2014年に八戸市で開催された日本雪氷学会など主催の雪氷研究大会で実行委員長を務めた佐々木教授。これまでの研究で雪の硬度や密度、結晶などの知見を得られたといい、「水資源

※ 「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」